



Data

監督・脚本: アレクサンドル・ソクーロフ

出演: ヨハネス・ツァイラー/アントン・アダシンスキー/イズルダ・ディシャウク/ゲオルク・フリードリヒ/ハンナ・シグラ/アンチェ・レーヴァルト/フロリアン・ブリュックナー/シグルズール・スクラソン/マキシム・メフメット/アンドレアス・シュミット/オリバー・ブーツ

👁️👁️ みどころ

ゲーテの『ファウスト』をきちんと読んだ人は少ないはず。「悪魔」との「契約」で魂を売り渡してしまったファウスト博士の運命は？

原作とは大きく違うそうだが、高利貸しの悪魔性は十分だしスリリングなストーリー展開は見応え十分。また、美しい映像はさすがベネチアでの金獅子賞！しかし、問題はあまりに難解なこと。ため息の中、私でも思わず簡易版を期待・・・？



■□■こりゃ難解！でも、ゲーテ文学にチャレンジ！■□■

ドイツの文豪「ゲーテ」の代表作が『ファウスト』であることはよく知られている。『ファウスト』は森鷗外の翻訳で日本に紹介され、手塚治虫による漫画本もあるが、それらをまともに読んだことのある人は少ないのでは？日本では鎖国していた徳川時代にも文化の華が開いたが、ヨーロッパのような神や悪魔の概念がないうえ、ドイツで最も進化した哲学もなかったから、そもそも神と悪魔そして契約という概念がわかりにくい。『ファウスト』の2人の主人公は錬金術をはじめあらゆる方面に精通しているハインリヒ・ファウスト博士（ヨハネス・ツァイラー）と悪魔のマウリツィウス・ミュラー（アントン・アダシンスキー）だが、その最大のポイントは、若く美しい女性マルガレーテ（イズルダ・ディシャウク）に惚れたファウスト博士が現在における快楽を得るべくマウリツィウスとの間で魂を売り渡す契約をすること。『モレク神』（99年）、『牡牛座 レーニンの肖像』（01年）、『太陽』（05年）3部作で有名なアレクサンドル・ソクーロフ監督は、そんな古典的かつ難解なテーマにいかにチャレンジ？

本作は、第68回ベネチア国際映画祭において全員一致で金獅子賞を受賞するとともに、

審査委員長のダーレン・アロノフスキーは「観た人を永遠に変えてしまう映画がある。この映画がまさにそうだ。」と褒め称えたが、それはゲーテや神や哲学に精通している人だから言えること。そういう方面にトンと疎い私たち日本人には、はっきり言って本作は難解！しかし、それではダメ。これを機会にゲーテ文学にチャレンジ！

■□■人間の魂はどこに？神は？悪魔は？■□■

イギリスの名探偵シャーロック・ホームズの助手はワトソンだが、ファウスト博士の助手はワーグナー（ゲオルク・フリードリヒ）。日本ではフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの娘イネが西洋医学を志し人体解剖に挑んだ話が有名だが、本作冒頭には人間の魂のありかを探すべく、ファウスト博士がワーグナーの力を借りながら人体を切り刻む姿が描かれる。なるほどこれも西洋流の合理主義？

結局、魂の所在を確認できなかったファウスト博士に対して、ワーグナーは「魂の正体を知っているのは神と悪魔だけです」「悪魔は金のあるところにいて、広場の近くに住んでいる男が悪魔と噂されている」とアドバイス。父親（シングルズール・スクラソン）からも「金を貸すことはできない、ましてや生きる意味など教えられない」と突き放されたファウスト博士の足は、高利貸しまウリツィウスの家に向かったが、面白いのは神父さえもここに出入りしていることだ。今ファウスト博士が求めているのは、人間の生きる意味の他、生きるために必要なカネを借りることだが、さて高利貸しまウリツィウスはそんなファウストに対していかなる対応を？そしてまた、ここから始まるファウスト博士と高利貸しまウリツィウスとの数々の「対話」の意味するものは？

■□■原作とは大きく違うらしいが・・・■□■

ゲーテの『ファウスト』では、「悪魔」と「契約」がキーワード。ところが、本作でマウリツィウスは悪魔ではなく、高利貸しとして登場する。このマウリツィウスは毒薬を飲んでも死ななかつたり、アウエルバッハの地下酒場では壁からワインをあふれ出させたり、ラストではファウスト博士を幻想的な岩山の中に連れ出したり、とさまざまな悪魔的な行動を示すが、さてその実態は？他方、弁護士の私が注目するのは契約の概念と契約書の作り方だが、本作を観ているとたしかに西洋流の「契約」の概念がよく理解できる。たかだか紙切れ1枚でも、契約は契約だから契約した以上守らなければならないという考え方が定着していることが、『ファウスト』のストーリー構成の根源かも？

もともと、ファウスト博士と高利貸し（悪魔？）マウリツィウスとのさまざまな哲学的対話が生まれるのは、ファウストが美しい娘マルグレーテに一目惚れしたことと、ある偶然によってファウストがマルグレーテの兄であるバレンティン（フロリアン・ブリュックナー）を殺してしまうためだが、そのストーリー展開はきわめて難しい。単純明快な邦画のストーリーに馴れた日本人にはついて行くのは大変だが、その美しい映像と何となく人間の本质について語っていそうだという直感を頼りに、全神経を集中させれば、どんな難解なテーマでも……。また、本作のストーリー展開は原作とは大きく違うらしいが、もともと原作をちゃんと知らないのだから、それは何の障害にもならないはず……。

■□■芸術作や重厚版もいいが、簡易版にも期待！■□■

トルストイの『戦争と平和』やドストエフスキーの『罪と罰』などは何度も映画化されているうえ、世界文学全集の一部として原作を多くの人が読んでいる。当然その中には難解な哲学が含まれているが、ストーリー展開的な面白さが十分あるから、1度読み始めたらやめられないという面もある。しかし、ゲーテの『ファウスト』になると、それはとても無理・・・？

そんな原作をロシアの巨匠アレクサンドル・ソクーロフ監督が映画化したのが本作だが、何度もいうとおりやはり難解で、終わった後は思わずため息が……。最近日本では、世界文学全集や日本文学全集にも簡易解説版(?)が出ているらしい。そんな傾向に私は否定的だが、本作についてだけは、芸術作や重厚版もいいが、簡易版にも期待！

2012(平成24)年5月2日記